

## 18の講義内容 文字の不思議さ

—(漢字の正字・通俗字、増画と省画。欠字と『千祿字書』。かな(誕生と広がり)。ローマ字)—  
漢字の「正字」と「通俗字」

「正字」という意識は、漢字を以て社会国家を統轄する権力者である中国の皇帝にとって、「正字」という概念は実に重要な役割を果たしていた。秦の始皇帝は、まず文字であるところの巷間の「漢字」表記を糺してこれを制定した。この制定は、国が代って「唐」・「宋」・「明」・「清」となっていく時にもこの制定事業は常に継続進行していく。そして、清国が作り上げた『康熙字典』は、漢字の正字と俗字を徹底記載した。これにより「正字」と「通俗字」が明確化に打ち出され、この制定の動きはそのまま日本国における漢字使用にも影響を与え続けてきたのである。

書記文字としての漢字は、こうした国家的な制定事業に大きく影響しているが、その文字の発音自体はといえば、中国全土を統治しても、地域差を持ち得ていた。その漢字音が日本国に渡来した時期によって、大きく「呉音」「漢音」「唐宋音」の三つに区分されているのはその現れでもある。よく、引用される漢字「京」は、「キヤウ」「ケイ」「キン」と発音する。日本以上に、漢字をいち早く継承した朝鮮半島にあつては、李朝時代の一四四六年に二十八の表音文字を制定してできた『訓民正音』(諺文・ハングル<sup>한글</sup>)が公布されている。字母に印度系文字原理、表音には中国の伝統的な音韻が基盤となっている。ここにも漢字音は、大いに働いているのである。

### 漢字の増画と省画—そして異体字—

#### 増画・省画の文字

この増画文字や省画文字は、一体何を意識して、このように書記したのでだろうか？通常の字体に一面乃至二面の増減を用いることで、風格が保持される。「太」字は、「大大」を「大」<sup>ミ</sup>とした一画「丿」を「大」文字に重ねた実にはややこしいしきたり文字と云えよう。影山修編『漢字起源の研究』(昭和十四年天泉社刊)によれば、「太」は、「この字はもと大と書いたものであるが、周の時代に文化が発達し、文字も**繁書**を尊ぶやうになり大の字を二つ重ねて「大大」と書くやうになったものである」という。下の点は、「大」の踊り字が「二」となり、やがて「一」から「丿」となったものである。彼の「周代文化における文字の**繁書**を尊ぶ」といった文字姿勢が本邦に伝来し、文字として継承されてきたことがこれを推定せしめる大きな動機付けとなった。日本の地名・人名に「大田」と「太田」や「大宰」と「太宰」などが現実に識別され用いられている。寺坊入り口頭上にある扁額に、「金剛大明神」の文字を「金剛大明神」と書いたりする扁額や書札を実際に写真の眼差しで見ると良からう。きっと多くのこれらの文字に出会うことができよう。奈良の当山日出夫さんは、現代の看板などの文字を含めて、このような文字を総称して、「景観文字」と表現しておられる。

#### 点文字の加減

〈増画〉 「土」「京」「石」「明」「氏」「民」「虫」「中」

「玉」「京」「石」「明」「氏」「民」「虫」「中」

〈省画〉 「国」「富」「達」「番」「瓜」「鬼」「太」  
「国」「富」「達」「番」「爪」「鬼」「大」

このような省画文字は、初画・終画においてなされるものだが、これとは異なる減画文字について若手研究者である奈良文化財研究所研究員の井上幸さんがその報告を随時始めている。「炭」「都」「楊」字など。私自にあっても「国」文字の減画文字を以前研究公開（「国」と「国」の文字を考える）駒澤短大國文第33号、平成十五年三月刊115・116頁）している。

### 異体表記文字

諺語辞書『譬喩盡』に、「命ほどいのち 宝は無なひ金銀はかね 浦物うらもの」（30⑧）という文句が見えています。この「だから」という文字だが、現代人の私たちは「宝」と表記し、旧字としては「寶」「寶」の二表記を使用する。古銭に「和銅開珎」という標記字が見えていることは、既にご存知であろうが、この訓み方を正しく訓めるのかとなると、やゝ疑わしいことになっているようだ。この文字も本来は「和銅開寶」であり、「寶」の字から真ん中の「珎」を抽出した略体文字の例である。であるからにして、訓みは「ワドウカイホウ」が正しい。事項で更に委しく述べることにはしたい。

この「宝」の字体は古字と呼ばれ、江戸時代の松葉軒東井は別な箇所では「壽いのちは法ほふの宝たから佛書」とも表記している。一人の編者や作家が同じことばの表記をこのように二種別表記にすることはよくあることだが、何故このような別表記をするのか、考えてみたことがありだろうか。

近代の文豪夏目漱石は、作字をふんだんに用いる作家として知られている。これを確認する絶好な資料が二〇〇七年に集英社新書『直筆で読む「坊っちゃん」夏目漱石』として刊行された。是非、ご

自身で手にとって読んで欲しい一冊の文学作品であると同時に文字資料なのである。「天麩羅蕎麦」「木易子」〔13②〕↓「楊子」。「二二棧五厘」〔62⑧⑭、93①③〕↓「壹一錢五厘」〔63⑦〕。「二所に」〔93⑧、107③④〕↓「一緒に」。「難有ふ」〔95⑤〕∴「難有う」〔99⑭〕↓「有難う」。「他国へ」〔96⑩〕。「日向の延延置」〔96⑳〕↓「延岡」。「作よ畧」〔98⑳〕↓「策略」。「計はかり畧」〔125⑳〕↓「計略」。「下味まい」〔110①〕∴「ままびい」〔110①〕。

### 略字

仏家の書記資料には、「井井（菩薩）」「四四四四（煩惱）」「土犬土犬（地獄）」「メメメメ（声聞）」「骨骨骨骨（髑髏）」などの略字がよく用いられている。むつかしい略字としては、「七火」と書いて、「涅槃ねはん」があったりする。現代人の筆記した文字にも「取取（職）人」「勞勞（働）」「目目に付く。「国」の文字も「口」で表記されたりもする。私が中学一年生のとき、時間割に「口語」と板書された先生がおられて、この「略文字」なる表記法に私自身、最初に出会ったとっかかりでもあった。私は即座に真摯に書いた先生にお訊ねした記憶が今も蘇えってくる。こうした「略字」は、その後怒濤の如く私の知る文字となって今日に至るからである。

### 漢字の欠画文字と『干祿字書』

「欠画文字」は、中国皇帝の名前に由来する文字である。日本に尤も古い時代に招来された書籍『千字文』には、この文字が見事に反映されている。



いずれも最終画面部分が欠画として表記されていることに気づくであろう。

### かな(誕生と広がり)

「かな」という文字は、日本語として活用している現在、その起源を精確に知る機会があってもよからう。まず、漢字があり、次に「万葉仮名」が日本文書文字に登場する。そのなかで「かな」という二種の字体が誕生していく。「カタカナ」と「ひらがな」この成立には、政治上の独立を保持する日本国家の保全政策が働いているのである。西暦六六三年、大和(倭)国は、朝鮮半島白村江(現在の錦江)において唐と新羅の連合軍と戦をして、倭軍は百済に味方して壊滅状態に陥っていたのである。この史料である『唐書』には、河口付近を鮮血で真っ赤に染まると記述されている。大陸で大敗した倭国は、全国の屈強な男達を防人として朝鮮海峡近い九州博多地方沿岸の防御にあたらせ、日本各地の戸籍簿も作るようになる。国号も改め、天皇の称号もこの時から使い出す。唐そして、新羅が脅威となっていたからだ。この時代の朝鮮半島は、高句麗と新羅が支配していて、唐は、この後も新羅と連合して高句麗を襲う。新羅の国には、新羅人だけでなく、任那人・百濟人・倭人そして、

唐人もいる。この状況は、日本国も同様で、唐人・南朝人から新羅人も居住している。この居住する人たちが新羅王国に忠誠を尽くしてもおかしくはない。倭国の都である琵琶湖大津に、新羅王国が誕生する可能性は一触即発な状況下となっていたであろう。この国王の身邊に従事する人々には中国や朝鮮半島から帰化した一族が大勢いて、この新天地で築き上げた所領地や財力を失いかねない。中国語で政策決定していれば、凡て官牒によって筒抜けになってしまうからだ。ここは土俗の言語である倭語(日本語)を公用語に用いようとする動きが急に活発化し、和式漢文が早急に考案されていくことになる。これが「万葉仮名」であり、私の日本語文化研究Ⅰを受講している学生の一人が「をみなへし【女郎花】」について詳細なりポートを書いてくれていて、『万葉集』でこの「をみなへし」の語が十四例が用いられていて、巻第四から巻第十までは、

巻第四「娘子部四」

巻第七「姫押」

巻第八「娘部思」「娘部志」「姫部志」

巻第十「姫部思」「佳人部為」「美人部師」「娘部四」

と千差万別の用字法が用いられているのに対して、巻十七以降における表記事例五例は、「乎美奈敝之」と統一された万葉仮名表記で記述されていることの相違を明らかにしている。このように、初期万葉時代の用字法と後記の用字法とでは大いなる異なりを見せているのである。巻十七以降の統一された万葉仮名とは別格である。むしろ、統一化された歌の方が妙に見えるのもそのためと見て良いのではなからうか。なぜ、字体の統一化が進んだのかを示唆していることで国家社会のあり方としてよくこの事情そのものを物語っていることにもなる。

※藤原宮跡出土木簡に、「熊毛評大贄伊委之煮」(山口県熊毛郡荷札木簡)と「與射評大贄伊和志」(京都府与謝

郡荷札木簡)の「ワ」文字表記の相違についての報告がなされている。また、平城京跡から「青郷御贄伊和志」(福井県西部、若狭国大飯郡)や「名錐郷秋科里荒伊委之」(三重県大王町波切)の木簡が出土している。これを国字「鰯」一字で表記した木簡も和銅三年(七一〇年)の長屋王邸跡木簡に「備中国小田郡鰯五斗」(岡山県南西部笠岡市付近)と書かれている例が見えている。

HB  
57

091

「鰯鯨鮭鮪」

※平城京発掘調査出土  
木簡概報(奈良国立文  
化財研究所、昭和五十  
二年刊より)

倭国が大陸から流入し続けた経済や文化的な文物のすべてを交易で培われていて、この交易ルート  
を有することが日本の農耕や織産等の形態も大幅に進歩させていったところに、大陸交易をこの敗  
戦で遮断されてしまう。この戦争が人を変え、技術向上が停滞してしまうことで、中国語漢文ではな  
い本格的な書記文字である「万葉仮名」を一斉に使い出すことへと転換を迫られていたということに  
「かな」誕生の起因があったのであろう。「風土」ということばは、当に適応を示唆することばであ  
り、「風」は外地から、「土」は内地を意味し、これが融合していく実態が当代に流通する「風土記」  
ということばの概念であったのである。西暦七二二年、太安万侶が『古事記』を献進した翌年の七一  
三年には古代地名である地名の漢字二字表記化は、「相模」(さがみ)「愛宕」(あたご)の表記にも痕跡を遺している。「武蔵」  
(中国音「ムザウ」)は「无邪志」「牟邪志」「胸刺」を好ましい文字に改字したものである。この  
二字式の地名表記は、その後の日本の地名を位置づける結果となっている。あなたがたの古郷の地名  
は何字で書いているか……。昨今、市町村合併で新地名も佳いが、悠久の歴史に耐えうる地名であ  
ってほしいと考えるのである。

次に、この仮名表記が「カタカナ」と「ひらがな」の二つの種類の表記を用いることは、何を意味  
しているのかということである。「カタカナ」は、仏教の經典を講読学習する学問僧が師僧の語るこ  
とば注釈を手早く書き取る手段として、漢字を省略形にして、これを書き出していった漢字付随式の  
表記文字である。漢字文の典籍を日本語に翻訳するに格好な表記文字だったということである。この  
発祥の根源を朝鮮仏教の經典注釈の訓読方法に求めることが「カタカナ」発想に見られるという。

次に「ひらがな」の文字は、和歌を詠むという貴族社会における男女の贈答歌を通して発生してい  
く表記文字となった。一枚の紙面に縦横びっしりに書き出す典籍とは異なる、空白を残す散らし書き  
には、この漢字を行書から草書、草書から変体仮名へと最大限に崩し書きして得た「ひらがな」表記  
そのものを生み出していくことになる。この空白部分を想定した書きぶりこそが漢字とカタカナでは  
出来ない世界でもあった。或意味の暗号文字めいた書きぶりとなつたのではなからうか。この表記法  
を男性と女性が織りなすコミュニケーションの文字として、大いに役立つものとなつたに相違ない。だ  
が、「ひらがな」が大成するまでには容易ならぬ時間を必要としたことは、平安時代の紀貫之が日本  
最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』(延喜五年(九〇五)成)の「仮名序」で見せた文章、更に  
は自らが女手の仮名文字で駆使した『土左日記』以て実践する試みからも察知されよう。これ以外に  
も物語の祖である伝奇物語『竹取翁物語絵巻』の詞書きを貫之が記述するといった『源氏物語』絵合  
巻の記述表現を信じて以て見るに、男性書記者としての貫之の存在があつて、漢文語がどうしても見  
え隠れすること自体、まだかな文の熟成に到達していないことを十分に物語っているのではなからう  
か。

## ローマ字

ローマ字表記の日本語文章として最も古い資料としては、十六世紀のキリシタン文学資料「[ドラー](#)  
[ドの印刷](#)」である。そのなかでも取り分け有名な作品資料は天草版『エソポの物語』・[天草版](#)『[平家](#)  
[物語](#)』〔[原文](#) [TXT](#)〕・天草版『[金句集](#)』等がある。しかし、これらローマ字書きの作品資料は、日本  
の禁教令によって、殆どが日本から消え、海外所蔵機関にのみ保管されているのが現況である。

※ <http://homepage3.nifty.com/non-yoko/mission/insatsu.html>

※ [http://www2s.biglobe.ne.jp/~Tajju/am\\_heike.htm#1\\_01](http://www2s.biglobe.ne.jp/~Tajju/am_heike.htm#1_01)

※ <http://www.jet.osaka-u.ac.jp/~okajima/bun/Feiqe/feiqe-01.txt>

次に、明治時代に於ける「ローマ字」表記資料は、石川啄木（一八八六―一九二二）が記した日記  
が世に知られている。『[啄木ローマ字日記](#)』〔[岩波文庫刊](#)〕という。この日記は、啄木が一九〇二年  
から一九一二年の死ぬ年まで、凡そ十年間、或時は集中的に途切れなしに日記を書き綴っている。ち  
ょうど彼が十六歳から二十六歳にわたる青春期である。そして、なぜ、ローマ字日記だったのか？ 桑  
原武雄解説文には、「啄木はローマ字という新しい表記法をとることによって、彼の上のしかかる  
いくつかの抑圧から逃れることができた、と考えられる。」と記載する。

※ [http://www.page.sannet.ne.jp/you\\_iwata/romaji19090407.html#A190947](http://www.page.sannet.ne.jp/you_iwata/romaji19090407.html#A190947)